

【フィリピン台風REMING活動報告書】

救急部看護師、国際医療救援部 河合 結子

2006年11月末にフィリピン東部を通過した台風21号(ドリアン/フィリピン名:レミン)により、ルソン島アルバイ州のマヨン火山周辺を中心に死者・行方不明者合わせて700名を越える大規模な被害が生じた。これをうけてキリノ州で基礎保健事業を行っていた私は、急遽日赤保健要員としてアルバイ州へ移動し、Legazpi という場所で2006年12月3~11日の9日間支援や視察の目的で活動した。

今回、キリノ州から被災地まで全て陸路であったために、到着までに2日間という時間を要した。コマーシャルフライトを手配するなど、現地入りが少しでも早く進むような動きをとる必要性を痛感した。また、車両で現地入りするメリットを最大に活かせるよう、前もって現地入りしているスタッフに物資や医薬品のニーズを聞き持参すべきでもあった。また現場での通信手段は情報入手していたが、地図を持参しておらず、地域名(Municipalレベル)も頭に入れてなかったことが反省点であった。

フィリピンでは災害が多く、DMS(Disaster Management Service)のスムーズな対応が観察できた。コーディネーターの役割や、レポートの仕組み、チーム構成、ミーティングやデータのアップデートなど一連の流れがつかめた。

初期治療班は5班編成されており、私はその第3班に加わり Busai の避難所で創傷の処置を行った。班はチームリーダーを含め7名で構成されており、そのうち2名は被災地の看護大学に通う看護学生であった。また3名は Alpha Rescue のメンバーで First Aid の資格を持ち、彼らはボランティアとして参加していた。そこにフィリピン赤十字のメンバーと私が加わり計9名で活動を行った。

チームリーダーによると Busai は他のバランガイに比べ、マヨン火山からの岩石により、全身に擦過傷を負った人が多いとのことであった。また、家屋の倒壊による瓦礫やガラスなどで下肢、足底に傷を負った人も多かった。血圧測定を希望する人も数名いた。

ボランティアの看護学生が名前と状態を聞き、その後 First Aid の資格を持つスタッフが創傷処置をおこなった。私も実際に創処置や処置の介助を行わせてもらった。創処置はまず、生理食塩水で傷を洗浄し、イソジン液にて消毒をし、必要に応じて、ドレッシング材を使用した。まだ消毒液や生理食塩水などの医療資材が不足しており、事前に薬局で買い足したり、イソジン液の代わりにコストが安く、薬局で簡単に入手できるオキシドール液を使用したりと少ない物資でやりくりしていた。2グループに別れ、処置を行い合計39名の患者の処置を行った。中には、病院で縫合処置を受けた患者も来ていたが、病院も多数の患者に対応しなくてはならなかったためか、十分洗浄がされておらず、感染の兆候がみられるケースもみられたが、低収入で病院に通院したり、抗生剤等の薬剤を購入したりすることができず、毎日傷の消毒だけ行っているという人もいた。

ファーストエイドのチームへ参加し、実際に受傷した被災者と交流することができたことは、ここでの最大の収穫であった。フィリピン人は比較のおおらかで子供たちも明るく過ごしていたが、長期化するに伴い、様々な支障が予測される。今後、避難所として使用している学校の運営方法が大きな課題のひとつである。またボランティア達へのスキルアップや住民へ防災・疾病予防教育を取り入れることが非常に重要であると感じた。

